

# 香織倶楽部の面々



小武禿織

広島県の東北・庄原市に「敦盛さん」という唄が伝わり、市の無形民俗文化財となつています。一の谷の合戦で、無官太夫の敦盛は、熊谷次郎直実に討たれ十六歳の若さで散つてゆきます。その敦盛に玉織姫という十五歳の妻があり、すでに身重の身であった玉織姫は、逃れ逃れて平家ゆかりの地永江の里(今の庄原の地)に隠れ住んだという伝承です。そしてこの伝承はこの地方に門付けにやつてきた旅芸人たちが唄っていたと伝えられています。

「敦盛」は、門付けの唄として、そして近世では能や歌舞伎そして講談となり、さらには近代では詩吟、唱歌として謡われてきました。こうしてその敦盛がクローズアップされる一方で、討つた武者・熊谷次郎直実が法然聖人の弟子となつたことは最後に一言語られる程度でありました。

「人間五十年 下天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり 一度生を受け滅せぬもののあるべきか」とは織田信長が本能寺で謳い舞いながら死んでゆく場面として有名ですが、これが敦盛を討つた直実が、武士を止めた時の言葉としてはほとんど知られていません。さらに、その後「これを菩提の種として」さだめざらざれば 悔しかりきしだい」と続く言葉のあつたことはまず語られません。熊谷次郎直実が法然聖人のお弟子となつて十五年、法然聖人の専修念仏教団は朝廷から解散させら



新井織堂

伊奈忠次物語の顛末

私の友人に、伊奈町の伊奈氏屋敷跡のそばにある長久寺の住職さんがおりました。彼は、伊奈忠次に興味を持っており、私が講談を勉強しているのを知ると、「伊奈忠次のことを講談にして語ってほしい」と言ってきました。荒川西遷と利根川の東遷のことは知っておりまして、伊奈忠次のこととは殆ど知りませんでしたので、そのお話はちよつと難しいとお答えしました。しかし彼は「この本を読んで欲しい」と伊奈一族の物語の本を渡してきたのです。パラパラパラとめくつたのですが頭痛がしてきたのですぐ閉じてしまいました。

それから一年経つた頃、彼の思いに答えようかなと思ひ直し、あちこちの資料を集めましたが何をどういう風にしたらいいのか皆目見当がつきません。そんなこんなでさらに一年経つてしまいました。せっかく手掛けたのだからと思ひ直して、台本を作り始めて完成するまでに一年が経過してしまいました。しかし台本を読んでみるとなんと三〇分もかかります。人の名前や年号も出てきます。戒名も出てきます。とてもこんな長くて難しいものは無理と思ひ、講談で一席を持つことは諦めました。それからはや一年。あれほど苦労した原稿をそのままにしておくのもつたいないと思ひ直し、ぼつぼつと練習を始めてみました。そうするとなんとか行けるかもしれないという感じがしてきました。



始めてみました。そうするとなんとか行けるかもしれないという感じがしてきました。

れ、弟子は死罪や流罪、法然聖人も流罪と成ります。さらにその後の歴史のなかで時の為政者から念仏教団への弾圧は続いていきました。「敦盛」の悲運の物語を伝承するその奥に

伝えんとされてきたものがあつたのではないかと思ひをめぐらし、今回は「青葉の笛 熊谷次郎出家の巻」として読ませて頂きます。



あべ織み

皆様はじめまして。静岡市在住の、あべ織みです。昨年9月よりオンライン教室に入れていただき、毎月第四木曜日の稽古室を楽しんでおります。

講談に出会つたのは十二年ほど前の、東日本大震災と福島原発事故の恐怖が未だ冷めやらぬ頃。静岡の「女性の会」が主催した講談会に、神田香織先生が来てくださいました。そこで、様々な社会問題もテーマにできる講談の面白さに惹かれると同時に、以前からやつていた演劇や朗読が作品の一字一句違えずに語らなければならぬのに比べて、講談の自由で懐の深い表現方法に大きな魅力を感じました。



現在、朗読家・ボイストレーナーとしての活動を中心にやつておりますが、講談の発声法は朗読にも(特に時代小説を読む時など)非常に活かせるのを感じて

練習を始めて何とか最後まで喋れるようになるのに一年かかりました。その後教室や友人に語り聞かせたところ散々の評価を頂いたのですが、アドバイスを受け入れ台本を修正し、なんとか発表会の台本にまとめることが出来ました。何と友人に声掛けしてもらつてから発表までに五年の歳月がかかりました



加藤織勝

「天保水滸伝 大利根河原の血闘 平手造酒」

今回の発表会では、天保水滸伝より平手造酒を題材に新たに創作いたしました、オリジナルの演目を披露いたします。平手造酒は、講談浪曲ではお馴染みですし、また映画や小説などにも取り上げられる人気者です。作品によって、コミカルであったり凄惨であったり、色々な人物像を見せますが、共通しているのは、大酒呑みであることと孤独な佇まいということでしょうか。

今回創作するにあたって気をつけたのは、主人公のバイタリテイで物語を動かすということではなく、大きな流れのなかで徒手空拳、必死に足掻いている姿を物語の舞台となる利根川の流れと重ね合わせ、自然な大きな流れの一部のように描くことができた、ということでした。さて、うまく成功していると良いのですが、ぜひ皆様のご感想をお聞かせください。



います。まずは基本をしつかり身につけて、そして私にもいずれ取り上げたいテーマがありますので、それを新作講談にしてご披露できる日を目標に、楽しく続けてまいりたいと思います。



田中伸織

講談のご利益  
私は高校で日本史が嫌いになった。

五〇頃の男教師が、生徒を見下す横柄な態度。話がガサツ。極め付けが書き殴りの板書10センチ角の文字が、下手過ぎて判読不能。私は「所詮は田舎の三流高校だからな」と諦めていた。この男が、私の日本史嫌いの元凶だ。

そんな私に、日本史の魅力を教えてくれたのが、講談だ。何より、人物描写が生き生きとしている。教科書・参考書では漢字の羅列に過ぎない人間たちが、講談では、その息遣いさえ私の中に憑依する。また、「南部坂の別れ」のクライマックス「義士の読み上げ」ができれば、どんな暗記も楽勝だ。(更に、講談は受験で「点になる」。例えば「雲居禪師」の後水尾天皇は「朝暮問題」の論述のネタだし、難関私大は「京都五山を全部書け」と聞いている。)

高校の時に講談に出会っていたら、私の人生も少しはマシンになっていただろう。本日ご来駕いただいた皆様は是非、若い人たちに講談の魅力を伝えて下さい。



相場織藤



長年通っていた教室を離れ、一昨年から香織先生の元で学ばせていただいて今

回が三回目の発表会となります。最初が古典作品ともいえる秋色桜、二回目が創作の松井須磨子、そして今回がまた古典に戻つて浜野矩随(のりゆき)を演じます。こちらは落語、講談両方があり私はどちらかと言うと落語をベースに作品作りをいたしました。こうした新しい趣向を受け入れていただけるのも香織教室の素晴らしいところだと思います。

この作品は名人で名高い人物を親に持つ職人の苦労話であり、落語では三代目の志ん朝が親を引き合いに自虐的なコメントをしますがが実際の高座は素晴らしく、親に引けを取らない感動を呼びます。親とは比べようも無く腕が悪いとずつとけなされてきた矩随が何をきっかけに変貌を遂げるのか、皆さんに見届けていただければ幸いです。

古典作品では逃げも隠れも出来ません。真剣勝負で精一杯務めますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



古今亭志ん朝



古今亭志ん朝・浜野矩随



浜野矩随 古今亭志ん朝



おりびあ

今回女性の出演者が少ないとの事で、弟子のおりびあが出させていた

くことになりました。講談協会でも女性前座が少なく、こんな見た目でも性別だけで呼んでいた事はい

あとは、お酒が飲めるというので呼んで頂くことも。気が利く前座としては：香織倶楽部ではベテランの生徒さん達がメタメタをパン読みますが、私は前座です。今回は神田派がよくかけるお歌合わせを読ませて頂きます。サロンで使っている台本からは大分手を加えてあり、牧野のキャラクターをもつとチャームング?にしております。

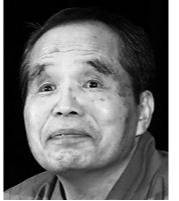


伊織

福田織福さんの代演として、久々に発表会に出ることになりました。私の初高座は9年前の発表会。あつ

という間に月日が経つてしまいました。最近、新たな挑戦をはじめました。埼玉県横瀬町で、横瀬講談プロジェクトと題し、講談会と新作講談作りによる地域の活性化に取り組んでいます。

2ヶ月に1度の集まりに来てくれる人はまだ15人ほど。ごくわずかなのですが、町の人口が8000人なので0.2%が参加していることとなります。これを東京都の人口に換算すると26000人!ひよつとすると大変に盛り上がっているのかもしれない。熱心な参加が多く、興味深い新作の題材が集まりはじめています。講談の可能性は無限です。サロン出身者として、自由にのびのびと、面白い挑戦を続けるつもりです。



高橋織丸

立ち止まる勇氣と継続する力  
講談発表会の会場として今やすつかり馴染みの「北とぴあ」が、来春から2

カ年間、全面休館と決定。しかしその後、この間の物価・資材・人件費等の高騰の煽りを受け、当初見込みの2100億円が既に190億円に膨らみ、計画を一旦中断して「再検討」することがつい最近決まった。北區は、23区の中でも財政的に下から数えた方が早い非富裕区だ。それだけに、湯水のように金を使えない事情もあるが、この勇氣ある決断は、大いに見習うべきではなからうか。

この国は、米国の中古の武器やロケットの爆買いと防衛費の大幅な増大を筆頭に、大阪万博、リニア新幹線、沖繩の辺野古基地建設、原発再稼働等をはじめ「中止」「再検討」すべき課題が、山ほどあるのが現状だ。

その一方で、私にとって講談は趣味道楽と言われながらも「継続は力」と信じて早16年半となる。講談は、庶民の怒りを代弁する話芸であり、太閤秀吉の刀狩り以来、武器を持たない民衆が、もう一つの修羅を生きるため、舌先三寸(舌刀)を使って、事実の裏に潜む真実をもとめ、その中から教訓や希望、夢をまるで「見てきたよううなうそ」として語る芸だと言われてきた。

神田香織師匠の「呆れ果てても、諦めない」「乱世を生きる力声を持つて」の言葉に魅了されて今日まで継続してきたもの、今なお目標にはほど遠い。昨年暮れに100歳で毎日ステッキを2本突きながら歩き、小説を書き、今も「完全護憲の会」の代表として活躍されている福田玲三さんを励ます「生涯現役の会」で講談を一席させて頂いた。この方の前では、喜寿を迎えた私もまだまだ鼻たれ小僧だ。